

特集・藍色をめぐる

伝統の阿波藍に新しい感性と息吹

氾濫を繰り返した吉野川流域の肥沃な大地から生まれてきた藍草の色が、2020年の東京五輪・パラリンピックのエンブレムに採用された。7月24日は「とくしま藍の日」。伝統の阿波の藍に新しい感性と息吹を吹き込もうと試みる現代の藍色の世界をめぐる。



藍師・新居修さん(板野郡上板町)

ジャパンブルーの名で海外にも知られる藍色は藍草で染める。真冬の空気がゆるみ、かすかに花の香を感じる風が吉野川の堤防をなでる春3月初旬の大安吉日、阿波とくしまの藍暦は種まきで始まる。天然染料の藍を生産して染(すくも)をつくる藍師は現在徳島県内に5人。6代続く藍師・新居修さん宅(板野郡上板町)でも作業が始まった。

3月種まき、4、5月植え付け、6月下旬から7、8、9月にかけて成長した藍を順次刈り取り、炎天下での藍こなしを経て、10月からは寝床に入れた葉藍を発酵させて染料の染にする。染づくりの作業は翌年1月末まで続く長丁場。藍の機嫌を伺いながらほどよい水を打ち、切り返し、寒ければ藁の布団を掛けるなど、どこまでも自然相手の勤と体力が勝負だが、染料の善し悪しは染の出来次第。長い経験が発酵する藍の状態を見極め、勘どころを押さえた作業を繰り返すことで上質の染が誕生する。江戸時代に全国を席捲し「阿波二十五万石、藍五十万石」と良品で知られた阿波藍の伝統を今も新居さんたち現代の藍師が受け継ぐ。